

# サポクラ 通信

令和5年(2023年)11月号

今月の内容は...

- ・アジアゾウの群れ .....1
- ・シンリンオオカミの標本化 .....4
- ・マレーグマの「ウメキチ」が転出しました .....7
- ・干支展【辰】 .....9

# アジアゾウの群れ



サポートクラブのみなさま、いつもご支援いただきまして

ありがとうございます。アジアゾウ担当の小林です。

今回はパール・タオ・ニヤインの同居についてお話します。

2023年8月19日22時39分。  
パール(20才)が無事にメス1頭を  
出産しました。

皆様からたくさんの投票をいただき、  
愛称は「**タオ**」に決まりました。



## ゾウの群れ

ゾウの群れは母系社会で、血縁関係のあるメスとその仔たちで形成されています。メスは基本的に生まれた群れに一生留まりますが、オスは成長すると10才前後で群れを出て単独で生活します。繁殖の際は、発情しているメスを見つけると群れに入って交尾をし、群れを離れます。

ゾウは群れ全体で子育てを行う動物で、母親以外にも周りのメスが出産や子育てを介助します。そのため、出産経験のない若いメスも出産の様子や子育てを学ぶことができ、自分が出産する際にその経験を活かすことができます。



## パールとシュティンの関係性

2018年11月にミャンマーからやってきた直後は、パールとシュティン・ニヤインは同居せず、別のグループでしたが、2018年12月よりメス3頭の同居を開始し、安定した群れを形成することができました。しかし、2021年3月にシュティンとパールの間で突然闘争が発生し、シュティンが右耳を負傷しました。その後、関係修復のために何度も3頭同居を試みましたが、現在まで関係の修復には至っておりません。

本来ならば、血縁関係はありませんがシュティン、ニヤインがいる中でパールの出産を迎えることが理想でしたが、残念ながら出産までに間に合いませんでした。

しかし、ポール越しではありますが出産の一部始終をニヤインに見せることができ、出産経験のないニヤインにとってはとても大きな経験になったと思います。



## 群れの形成にむけて

ニヤインはポール越しにタオと積極的にコミュニケーションを取る様子が観察されていました。パールやタオとの関係性を考慮し、メス群れの形成に向けて、まずはパール・タオ・ニヤインの3頭同居を始めました。ポール越しでは良好な関係性に見えていても、いざ同じエリアに入ると豹変することもあります。とくに母親のパールがタオを守ろうとニヤインに対して攻撃的になる可能性も十分考えられ、緊迫した空気の中で同居を開始しました。

最初は3頭とも警戒し、ニヤインがタオに近づくと、パールが攻撃することもありましたが、時間が経過するとともに落ち着き、ニヤインとタオがコミュニケーションを取っていてもパールが許容する様子が見られるようになりました。

その後も同居回数を重ねるごとに関係性は良好になり、パールから離れた場所でもニヤインとタオがコミュニケーションを取っている様子も増えてきています。

## 今後は・・・

今後は3頭同居の回数を増やし、同居時間も徐々に伸ばし、終日同居を目指していきます。  
次に、シュティンを加えたメス群れの形成を目指します。

いつかニヤインが妊娠した際には、群れの中で出産、シュティンとパールが介助、そしてそれを見てタオが学ぶことができる環境を作ります。

それこそが「ゾウがゾウらしく暮らせる」理想的な環境と、円山動物園は考えています。



## 飼育2係

円山動物園サポートクラブのみなさま、いつもご支援いただき、誠にありがとうございます。  
チンパンジーとシンリンオオカミを担当している高岡と申します。  
今回はエゾシカ・オオカミ舎に展示したシンリンオオカミのはく製標本についてご紹介します。

### 「オオカミをどう伝えるか」

2022年12月号のサポクラ通信では展示復活となったシンリンオオカミ2頭の来園の経緯とその様子をお伝えしました。2頭の来園が決まる以前は、その前の飼育個体「ジェイ」(オス)をもって円山でのオオカミの飼育展示は終了の予定となっていました。

オオカミが断念種と決まった際、その後のエゾシカ・オオカミ舎で北海道の生態系を伝える方法について検討しました。オオカミを飼育していた当時の写真を掲示するだけでは、オオカミがかつて北海道の生態系のトップに君臨していた迫力が伝わりにくいのではないか、現在1階で展示しているエゾシカやヨーロッパオオカミの毛皮のように大きさが伝わる展示ができないか、できればそのままの姿でエゾシカ・オオカミ舎に残したい…。色々考えた結果、ジェイを「はく製標本」にする案にたどり着きました。

### 「はく製標本の難しさ」

円山動物園の科学館ホールには現在たくさんの動物のはく製標本が展示されています。他の自然科学系の博物館で目にすることも多いのではないのでしょうか。はく製標本の学術的な価値は、動物の形態を角や毛、羽の色も含めて保存できる点にあります。種の同定にも使用され、その種の基準になる標本も存在します。はく製標本は博物館や旅館、土産店などでよく見かけますが、その最大の特徴はまるで生きているかのような迫力を感じられることです。

さて、はく製標本はどのように作られるかというと、死んでしまった動物の毛や羽、皮はそのまま使用します。骨格は重く、内臓は腐敗してしまうため、一般的に体の中は綿、現在では発泡ウレタンが詰められていることがほとんどです。本来、はく製標本になる動物は野生で綺麗な形態を残して死んでしまった個体や、標本のために狩猟された個体を使用します。

ジェイの死後、はく製標本を作る際に課題となったのが「体格」と「毛皮」でした。ジェイは最期、寝たきりになってからも私たちに野生動物の力強さを見せてくれましたが(療養の様子は2022年5月号のサポクラ通信でお伝えしています)、その頑張りの結果、腰や臀部は床ずれで毛がなくなってしまう部分がありました。また、食欲が落ちていたこともあり、元気なころと比べて体重も落ち、見た目もかなりほっそりしていました。



はく製標本にする際にジェイの「いつ」「どのような」状態を保存するのか、そのために毛の量や体格を調整していく必要がありました。毛のなくなってしまったところには、補填も必要です。

オオカミは年に2回換毛期がありますが、とくに夏毛になると体の大きさが目に見えて細くなり、大量の冬毛が抜け落ちます。換毛期に抜け落ちた毛は保管してありましたが、オオカミの毛色は身体部位によって色がまったく違い、腰の黒っぽい毛をお腹の白い部分にはあてられないなど、実際に毛をあてて見てみると保管してある毛だけで補うことは難しいことが分かりました。冬毛のモコモコとした状態の再現は特に困難です。



## 「よみがえる毛皮」

はく製作りは日頃から円山動物園もお世話になっている、様々な標本を作製している団体をお願いしていました。標本作成のプロの方たちですので、毛皮についてもいくつかのアイデアをすぐに提案してくださいました。



最終的に、毛が足りない部分はトナカイやコヨーテの毛皮で似た色の部分を使用することになりました。大きなトナカイの毛皮を持ってきていただき、実際にジェイのお腹にあてて色味を確認してみると毛の色だけでなく質感もよく似ているようでした。同じ寒冷地に生息する動物同士、毛の密度が高く、毛足が長いという共通点があったようです。コヨーテはさすがオオカミに近い仲間、同じ部位の毛皮をあててみると境目が分からないほど馴染んでいました。

実際に端切れをあてて微妙な色の調整をしていただきながら、どの部分に何の動物のどこの部分の毛皮を充てるか、ジェイの毛が抜けた部分の形に合わせて決めていきます。一部は用意して下さった毛皮を染めることで、本当に微妙な色の違いや自然なグラデーションを再現してくださいました。私たち飼育係はただ横で見ているばかりでしたが、とても真似できないような繊細な作業を長時間にわたって、納得いくまで作業をしていただきました。プロの底力を見せていただいた瞬間でした。



## 「シンリンオオカミ展示復活の裏で」

はく製の製作がすすむ一方、エゾシカ・オオカミ舎には新たに2頭のシンリンオオカミが迎え入れられることとなりました。当初はオオカミを展示していない状態ではく製標本を展示する想定でしたが、元気なオオカミを展示すると同時に、間近でじっくりと形態を観察することができる標本を展示する意義はとても大きいと思っています。目や唇など顔の細部まで忠実に再現してくださった製作者の方の熱い思いも一緒に感じていただけるはずです。完成したはく製標本は現在エゾシカ・オオカミ舎の2階に展示してあります。（※夏季、展示ケース内が高温多湿になる場合は一時展示を中止する場合があります）

今回のシンリンオオカミのはく製標本化・展示にかかわる費用については、すべてサポートクラブへの御寄付を使用させていただきました。この場を借りて、ご支援いただいている皆様に心より感謝申し上げます。今後一層、よりよい展示ができるよう力を入れてまいります。

展示中止から一転、賑やかになったエゾシカ・オオカミ舎の2階にもぜひ足をお運びください。



# マレーグマの「ウメキチ」が転出しました

円山動物園サポートクラブのみなさま、いつもありがとうございます。マレーグマを担当している柏淵です。今回は 10 月 25 日に周南市徳山動物園(山口県)へ転出したマレーグマ「ウメキチ」(オス、2009 年 10 月 11 日 上野動物園生まれ)のお話です。

## はじめに

みなさんは公益社団法人日本動物園水族館協会をご存知でしょうか？英名は Japanese Association of Zoos and Aquariums といい、アルファベットによる公式の略称はその頭文字をとって JAZA(ジャザ)と呼ばれています。日本の動物園、水族館で構成されている公益社団法人で、教育活動の充実や良好な動物福祉の確保、希少動物の保護繁殖などを目的に掲げています。もちろん円山動物園も正会員となっております。今回のウメキチ移動計画につきましても JAZA 加盟のマレーグマ飼育園館において検討を重ねた結果、国内で 20 頭未満となった飼育個体数の増加が急務であるとされ、現在いずれも 1 頭で飼育されているウメキチおよび徳山動物園の「マーヤ」(メス、2005 年 5 月 17 日 名古屋市東山動植物園生まれ)とのペアにより繁殖に取り組む意向が示され、徳山動物園への転出が決まりました。円山動物園としましては、徳山動物園におけるウメキチとマーヤの繁殖の取り組みが、国内個体群の維持に必要であることを考慮し、その成功を願い、考え得る万全の態勢でウメキチを送り出すこととしました。



2011 年 7 月のウメキチ  
旧世界のクマ館の屋外展示場

## ウメキチ転出の準備

まず初めに、円山での飼育方法、飼育場や飼育・治療の履歴などは事前に情報共有しておりましたが、百聞は一見に如かずということで、本年 6 月に徳山動物園の飼育員および獣医師に円山に来ていただきました。今回の移動が無事に終わられた一番の要因は、両動物園の飼育員、獣医師が顔をあわせて実地研修したことだと心底思っています。その後 8 月からは、マレーグマ獣舎に輸送用の移動檻を設置してウメキチが自分から入る訓練を 2 か月間毎朝行いました。今回の移動檻は、万が一の際にすぐ治療を行えるように工夫して製作してもらった特注品です。







2023年10月のウメキチ 熱帯雨林館屋内展示場

## いざ出発

ウメキチ移動日は天気にも恵まれ札幌の最高気温も20℃とベストコンディションでした。

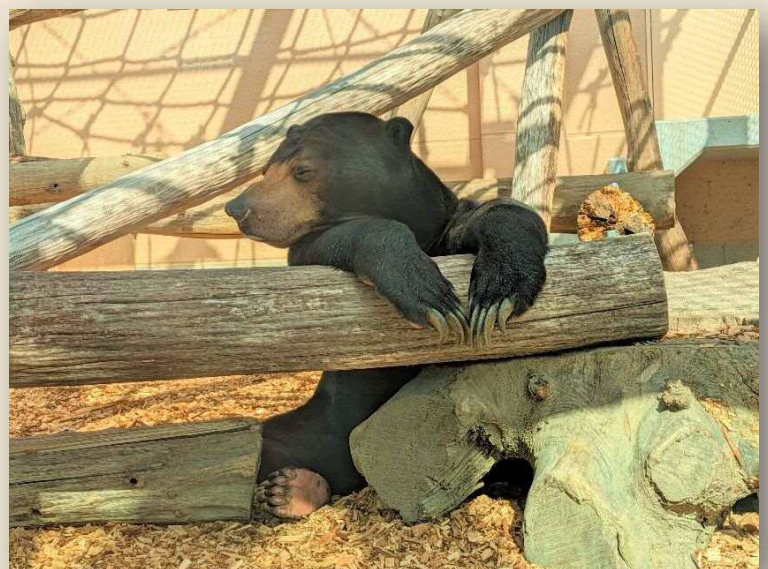
移動檻への収容は想像以上にスムーズで、収容後のウメキチも落ち着いていました。感傷に浸る間もなく円山から旅立っていきました。なお、空港までは飼育担当者と獣医師が同行しました。



## 周南市徳山動物園(山口県)

徳山動物園は1975年、マレーグマにおける国内初の繁殖成功以来、繁殖に取り組み続け令和3年(2021年)11月から新しいマレーグマ獣舎の供用を開始した動物園です。ウメキチは徳山動物園に到着後すぐにエサを食べ環境の変化にもなれたようです。

ウメキチの飼育担当者として、徳山動物園でものびのびと元気に暮らし、そして繁殖に成功することを祈っています。



徳山動物園でのウメキチ 写真提供：徳山動物園

# ETOTEN TATU

エトテンタツ

2024

サポートクラブの皆様こんにちは！動物解説専門員の早川です。  
今回は、毎年ご好評をいただいている「干支展」についてのご案内です。

日時：2023年12月9日（土）～2024年1月8日（月）

場所：動物園センター情報ホール、第一レストハウス、園内の各獣舎

参加費：無料（別途、入園料がかかります。）

## ポスター展示

竜の姿は「竜に九似あり」と言い、  
9つの動物のある部分に似ていると言われています。

竜にまつわる9つの動物についてのポスターを、  
動物園センター情報ホールで展示します。

三が日限定

## 絵馬の配布

「辰」にちなんだ絵馬を  
第一レストハウスで配布いたします。

（※各日先着 300 名様）

1月6・7・8日限定

## クイズラリー

竜にまつわる動物についての  
クイズラリーを開催いたします。  
詳細は、実施日に情報ホールに掲示  
いたします。ぜひご参加ください！

冬の円山動物園も見どころがいっぱいです！ぜひご来園ください！